

『田舎病院の矜持』

西脇市立西脇病院

病院長 岩井 正 秀

『ちょうどいい田舎』—これは、わが町西脇のキャッチフレーズの一つである。何を基準にちょうどいいと判断するのかは、それは色々と意見のあるところだろう。ただ、長年この地で生活していると、確かにこのくらいの地域が暮らすのにはちょうどいいなと思えてくるから不思議だ。言うまでもなく都会ではない。しかし大きな不自由を感じることもなく、のんびりとした空気と豊かな自然がここにはある。

当院がこの地に設立されて60余年が経つ。そして、ここに住む人たちが、田舎だけどころでちょうどいいと、そう感じるものがあれば、そこには当院の存在も少なからず寄与しているのではないかと思う。また逆に、当院も、この地域を愛する人たちの力で危機をなんとか凌いできたという経緯もある。

県下では様々な規模の病院の合併が盛んに行われている。大規模な病院で、マンパワーや設備が整っていないと医者が集まらないのだという。しかし、それは医療者側の論理である。田舎は人口が減少しているから、病院も集約化して数を減らすべきだという。しかし、それは都会側の論理である。勿論、限りある医療資源を有効に使うことは必要であるし、医療機関の役割分担も考えなくてはいけない。しかし当地においては、人口減少は徐々に進行するも、この先20年にわたり65歳以上の人口は変化しないと推計されている。すなわち病気になりやすい人達は常に、ここにも暮らしているということである。このことを考慮すると、安易に田舎やへき地の医療の密度を低下させ、その結果としてその地域の急性期医療が不十分になるようなことは、絶対に避けなくてはならない。

近年、地域包括ケアシステムの構築が推進されているが、その中においても、急性期病院が如何なる場所に存在するかが大変重要である。高齢化率の上昇と共に、交通の不便な地域に暮らす独居老人や、老々介護の家庭も増加している。そして発病時には、近所の人に頼んで受診することや、救急車を呼ぶことも少なくない。しかし、そういう手段を講じてなんとか病院に来れば、入院し治療して、また元気になって自宅に帰る人たちも数多くいる。時には当院では十分な加療ができないと判断し、さらに高次の病院に転送することもある。そのようにして当院はこの地域の医療を守ってきたし、今後もそうあるべきだと考えている。

当院と同様な立場の病院や、さらにへき地において少人数の医療者で努力している病院も多い。厳しい状況が続くが、医療を必要とする人たちがその地域に暮らしている限り、田舎病院としての矜持を胸に診療を続けたいと思うのである。